

名戸ヶ谷記念病院が開院

回復期と地域包括ケアに重点

名戸ヶ谷記念病院(山崎研一院長が7月1日、運営する社会医療法人社団 笹水会発祥の旧名戸ヶ谷病院跡地で新設、開院した。同会専務理事で脳神経外科医の山崎院長が舵をとり、「治療に留まらず、患者の社会復帰まで丁寧に対応していきたい」と話す。

地域支える 医療推進

名戸ヶ谷病院は令和2年12月に現在の新柏に移転、新設した。従来の急性期を軸に高度医療を推進し、実績に富む医師らを集めている。急性期を推進すると、ややも難しくなるのが回復期と話す。

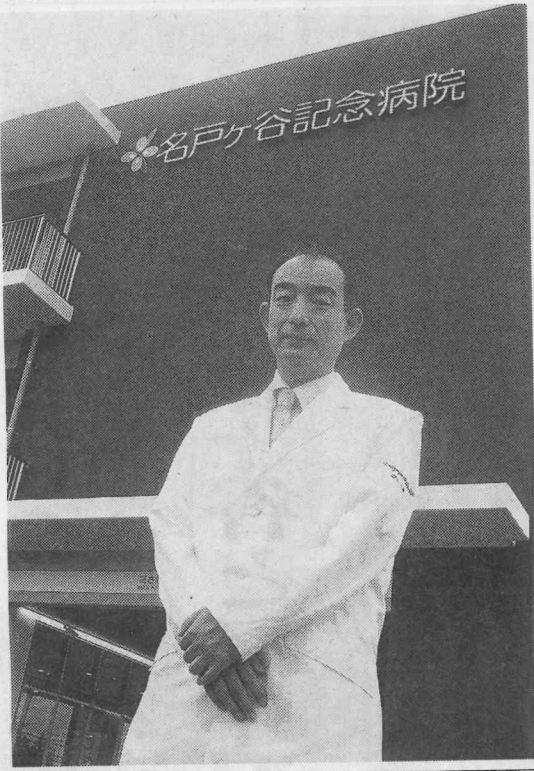
回復期の入院治療。急性期の患者が増えるとおのずと回復期の患者の受け入れが難しくなる。病床数は都道府県で管理され、増床は各自自治体の計画に基づいてのみ行うためだ。笹水会では新病院の移転、新設もなく、この課題に着手。千葉県が新たな病床配分を示したこ

00平方メートルのリハビリテーション室とつながる。常勤医は5人、看護師は正准合わせ53人、理学療法士16人、作業療法士6人、言語聴覚士4人でスタート。順次増員を図る予定で、常勤医は来月1人の赴任が決まっている。

とを受け、回復期に重点を置く記念病院整備を計画した。

シオンは、患者の機能回復をめざす。地域包括ケア病床は、在宅療養中の患者の緊急対応(レスパイト入院)のために設置される。いずれも患者のQOL向上に重要な機能。山崎院長は「急性期の新柏の新病院とともに地域に貢献していく」と決意を語った。

今月18日時点で、回復期の入院が12人、地域包括ケアが11人。山崎院長は「かかりつけ医との連携を想定し、「地域との意思疎通をより広げ、患者の復帰を手伝えれば」と話した。



「治療から社会復帰まで丁寧に対応する」と山崎研一院長